



うもれ木

魚津埋没林博物館広報誌

創刊号

発行日：平成6年3月1日
編集発行：魚津埋没林博物館
印刷：魚津印刷(株)

創刊にあたって



館長 浦田 浩

平成4年4月に魚津埋没林博物館が新たな装いでオープンし、早くも2年が過ぎようとしている。新館になってから既に25万人を超える方々にご利用いただき、深く感謝するとともに月日の経過の早さを痛感させられている。この度、広報誌「うもれ木」を発刊し、皆様のご評価を仰ぐ運びとなった。遅ればせ、とはあまりよい表現ではないが、思えば昭和30年の旧館の開館以来、はじめての埋没林博物館の広報誌が誕生した次第である。

魚津埋没林博物館は、上述のとおり昭和30年に、富山県内の自然科学系第1号の登録博物館として出発した。以来これまでの40年近い歴史のなかで、「特別天然記念物 魚津埋没林」という貴重な生の資料の保存・展示を通して、地域の教育に果たしてきた役割は小さからぬものと自負している。しかしながら旧館時代には、館が主体となった教育普及事業はあまり活発でなく、その意味では必ずしも有効に活用されていたとは言えない部分もあった。その反省も踏まえ、新装オープンを期に各種の特別展や教室の開催などの企画に努力しているところであるが、この広報誌の発行によってさらに厚みと幅をつけて

いくことができると願っている。

魚津市は、埋没林、蟹気楼、ホタルイカなど海と深く結びついた神秘に満ちた場所として知られるところである。その一方、市の面積の実に約50%を僧ヶ岳や毛勝三山に代表される豊かだが険しい山地が占めていることは忘れられがちである。樹齢数百年、洞杉と呼ばれるスギの巨木群や、やはり樹齢数百年に達するトチの森、そしてカモシカ、ツキノワグマ、ニホンザルなど、太古から連綿と営まれ、その険しさゆえに残されてきた貴重な自然の姿がそこにはある。そしてその山地を源とする片貝川や角川などの急流河川が谷を刻み、扇状地を潤し、おいしい地下水をはじめとした数々の恵みを我々に与えてくれている。つまりこの魚津市は、深海のホタルイカから2400mクラスの毛勝三山まで、極めて変化にとんだ自然の宝庫なのである。この恵まれた環境を背景として、埋没林や蟹気楼のみにとどまらず、豊富な材料をうまく取り込みつつ内容豊かな博物館を作って行こうと、館員一同意欲を持って運営に当たっているところである。

生涯学習の意識が着実に浸透しつつある今日、博物館にも各方面から期待が寄せられている。広報誌は展示物や建物の外観と並ぶ博物館の顔とも言えるべきものである。そうした意味からも広報誌の担う役割は大きく、今後の継続と充実には大きな力を注いで行かねばならないであろう。そしてその結果として多くの方々からの支持を得ることができれば幸いである。



発刊によせて

管理課長 下村 一夫

“富山湾の3大奇観”というより、魚津といえば蟹気楼、埋没林とホタルイカということで、魚津市には全部揃っている。これは世界的にも大変特異な事ではないかと思う。



“蟹気楼の見える街 魚津”と市のキャッチフレーズにも使われている蟹気楼だが、一年を通していつでも見られなければ魚津へ人は来てくれない。『名所見たさにはるばる来たが 来れば出ないし 帰れば出るし ほんにしんきな蟹気楼』と歌に唄われていてはいつまでたっても魚津市の活性化はできない。今、全国の市町村が目まぐるしく変化する社会環境に適応して生き抜くため、独自の街づくり、地域づくりに取り組んでしのぎを削っている。魚津市もその例外ではない。人口はこのところずっと横ばい状態で増加しない。市の経済を支えてきた商工業も不況であえいでいる。もっと地域の特色を生かした、独創的で個性的なものを目指した魚津らしさのあるどこにも負けない街づくりこそ旅人を魅了し感動を与えるのである。



ここに魚津らしさを代表する埋没林博物館が平成4年4月、魚津市制40周年を記念してオープンした。国の特別天然記念物の指定を受けた魚津埋没林の包蔵地に白い屋根とブルーの外壁をもち、その外観は杉の木を形どったのかあるいは魚津祭りの主役である“たてもん”の姿に似せたのか、スマートに斬新なデザインで蟹気楼ロードの開通とともに新しく開館した。平成4年度の入館者は14万人を数え、5年の8月には20万人に達した。これらの入館者の多くは団体観光旅行のバスで、あるいは個人、家族連れで旅の途中に入館されている。団体入館者のうち県内からは28%で、72%が県外からであるというデータが示すように、地域との関わりや地域の独自性を生かした博物館という位置付けを根ざしている割には地元の人の入館が少ないという現状をどう考えるか。博物館という言葉のイメージから、学問や専門的な研究の場としてのとらえ方が強く、何か硬いイ

メージが前面に出てしまっているのではないかと思ったりもする。



今や日本は経済大国となり、国民は物質文明を謳歌してお金で買えないものはもう何もないというくらいの感覚に慣れきってしまった。こういう時こそ精神的なものが見直され、美的感覚や知的感覚といった感性を磨く場として、また生涯学習の場としての博物館、美術館等の役割があるのではないだろうか。もっと地域の人とのコミュニケーションができる場として、情報の発信基地としての博物館づくりを目指していかなければならない。常に“見る”側に立ち、ふだん着で遊び感覚を持って入館できるような参加型のイベントの企画や、同種、同系統の博物館との人・物両面の交流を通し、モノでなくヒトが中心の博物館として、見て、体験してストレートに楽しめる環境づくりが大切だと思う。博物館が本来持つ収集、保存、公開、調査研究、教育普及といった基本的な仕事を通して、市民の文化的要求に答えられる企画を通じて親密な関係を築き、参画型で情報発信性が高い「どこにも負けない生きた博物館」として育て上げていきたいものである。



埋没林博物館に勤務して1年たらずが過ぎ、雨の日、風の日、雪の日と四季折々に変化する光のなかで千古の流れを耐えてきた摩訶不思議な根っこたちに包まれていると、さまざまな感慨に駆られる。2000年間もの長い年月埋もれたままで人類の過去をじっと見守り、そしてまた、地球と人類の未来を黙ったままで見続けていく埋没林を思うとき、それにつけても人間の一生などなんとはいかない小さなものかと宗教的、哲学的にも似た感慨にひたってしまう。静かにクラシック音楽が流れる中で展示館の水中に潜む埋没樹根を見ていると、荘厳さの中に神秘的で何か不思議なパワーと、朽ち果てもせず形をとどめて私たちに何かを伝えたいという生への限りないエネルギーを見せつけられる。そこからは人類の未来と地球の未来へ熱いメッセージを送り続けているように思われる。

沿革

- 昭和5年11月 ● 魚津港修築工事中に多数の埋没樹根出土
- 昭和8月11日 ● 県・天然記念物に仮指定(4800㎡)
- 昭和11年12月 ● 国・天然記念物に指定
 - 保存舎建設
- 昭和27年 ● 埋没林発掘調査
- 昭和28年3月 ● 国・天然記念物に1350㎡を追加
- 昭和28～29年 ● 自然保存館建設・富山産業大博覧会魚津会場として一般公開



- 平成元年3月 ● 魚津市埋没林メモリアルパーク整備事業基本計画策定
- 6月 ● ふるさとづくり特別対策事業として指定を受ける
- 7月 ● 指定地発掘調査(～12月)
- 8月 ● 人工蜃気楼発生装置製作(～2年5月)
- 平成2年5月 ● 県道バイパス法線変更に伴い基本計画を再度策定
- 平成3年1月 ● 埋没林博物館施設実施設計
- 3月 ● 起工式
- 12月 ● 常設展示、映像・音響機器製作(～4年3月)
- 平成4年4月 ● 竣工式・新装開館



- 昭和30年4月 ● 市立博物館として開館
 - 埋没林博物館条例を制定
- 8月 ● 指定地を特別天然記念物に指定
- 昭和59～60年 ● 県道バイパス計画に基づき魚津埋没林の整備について県、文化庁と協議
- 昭和61年 ● 埋没林環境整備計画を作成、指定地の現状変更申請を文化庁へ提出、許可を得る
 - 埋没林メモリアルパーク懇談会を設置



施設概要

- 敷地面積/16,336㎡ (うち指定地6,150㎡)
- 延べ床面積/3,501㎡
- 駐車場/100台収容(4,000㎡)
- 施設構成/管理棟、テーマ館、保存1号館、保存2号館、保存3号館、機械棟
- 展示内容/埋没林保存展示(樹根9点、樹幹2点)、人工蜃気楼発生装置(ミラージュ・シアター)、他

この展示物☆ここに注目

入口ホール の樹根

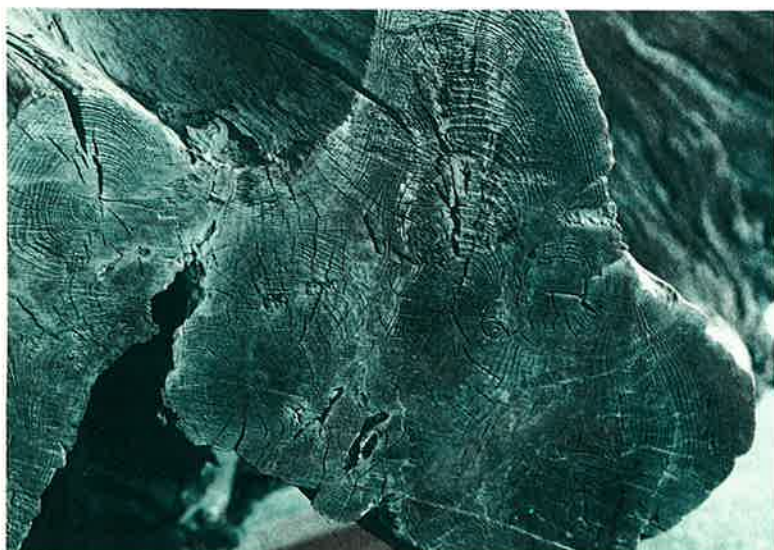


入口ホールの一隅に入館者を出迎えるように置かれた樹根がある。この樹根は昭和5年の魚津港修築工事で掘り出されたものの一つで、現場からの撤去のために根は断ち切られているが、直径は2mほどある。

ほかの展示室に行く前に足を止めてじっくり観察してみよう。根が上と下の2段になっているのが見て取れる。スギの木が埋もれていく間に、もとの根より上からもう1段根を出して幹を支えたものであ

る。幹は木が枯れた後に腐ってなくなっているため年輪を見ることはできないが、根の断面を観察すると細かい年輪がある。根にも立派な年輪ができるのだとあらためて感心させられる。さらによく見ると、太い根では年輪の中心が一つではないことがわかる。根が枝分かれした部分なのか別々に出た根がくっつきあったものなのか定かでないが、いくつかの年輪が合わさってひょうたん形や何とも表現しがたい複雑な模様が描かれている。

この根は、スギの木が水面の上昇や土砂の堆積に耐え、その苛酷な環境変化に力尽きてしまうまで、数百年を生き抜いた生命力の強さを見せつけている。2段構えになったその根に何を读取取るかは人により異なるが、この力強い生命力を感じ取り、さらにほかの巨大な樹根を見ていただければ埋没林の印象がより鮮明に残るのではないだろうか。



シリーズ

埋没林の仲間たち ①

魚津埋没林は昭和初期に発見され、昭和5年、27年、平成元年に調査が行われている。これまでの調査によって発見、報告された植物は、木材、果実、種、花粉などを合わせ数十種類に達している。その仲間たちを毎回シリーズで紹介する。

スギ *Cryptomeria japonica* (Linn. fil.) D. Don

スギは、日本特産のスギ科スギ属の常緑針葉樹で、日本では最も大きくなる寿命の長い木と言われている。鹿児島県屋久島には直径6.5m、高さ65mに達し、樹齢3000年以上、一説には7000年以上と推定されるものもある。

スギには大きく分けて太平洋側のオモテスギと日本海側のアシウスギ(アシオスギ、ウラスギ)の2系統があり、さらに多くの品種がある。アシウスギは葉の開く角度が狭く、下枝が垂れて地面につくと根を出して新しい株を作る性質が強い。これは雪に対する適応と考えられている。富山県の県木のタテヤマスギは、アシウスギの品種の一つで、魚津埋没林のスギもこの系統と思われる。県内ではほかにマシヤマスギ、ボカスギなどの品種がよく植林される。

スギといえば花粉症の原因としても名高く、毎年春先の開花時期には多くの人の恨みを買っている。スギには雄花と雌花があり、風によって受粉する風媒花である。雄花は広い空中に煙のように花粉を出し、雌花は小さな花粉が飛んでくるのをじっと待っている。そのため昆虫などが花から花へ直接花粉を運ぶ虫媒花よりも効率が悪く、大量の花粉が必要になるのである。各地で最もよく植林されていることもあり、花粉症の原因植物の筆頭になってしまっている。

その一方では、建築、器具など幅広い用途の重要な林産資源として我々はスギの恩恵を被っている。また、北山杉や秋田杉など日本の景観を代表する美林と言われるものや、屋久杉のように文化財的価値の高いものもある。魚津市では、片貝川上流の標高500~700mの間に洞杉と呼ばれる巨木群がある。樹齢数百年と推定され、直径2~3m、高さ20~30mに達する。そのほとんどは巨岩の上に生育し、岩上から地面に向かって伸びる太い根は竜や大蛇を思わせ、見るものを圧倒する力強さがある。

魚津埋没林のスギは出土木材の約9割を占め、直径1~2m、樹齢300~500年と推定される大きなものが多い。昭和5年の魚津港修築工事では大小合わせて200株以上のスギの根株が出土したと記録され、埋没林の広がりや周辺は未調査地域を合わせると相当の面積になると推測される。氷河時代以後の温暖期、寒冷期を経る間にスギは分布の拡大と縮小をくり返したと考えられる。このスギの巨木林が海岸近くにどのように進出し、そして埋没していったのかまだまだ解明されない部分も多い。



行事報告

平成
4年度

新館入館者20万人達成(平成5年度)

平成
5年度

博物館教室(6月12日)

- 平成4年4月28日 新館竣工式
29日 新館オープン
7月9日 ジャパンエキスポ富山開催にともない
秋篠宮・同妃両殿下ご見学
10月4日 新館入館者10万人達成
11月1日 蜃気楼写真展(～11月30日)
11月14日 博物館教室「埋没林の姿を探る～杉沢の沢スギと埋没林」参加19人
12月12日 博物館教室「石器時代のワザに挑戦ー石器づくりー」参加27人
- 平成5年3月13日 博物館教室「蜃気楼現象をつくってみよう～蜃気楼って何!?」参加16人
- 平成5年5月8日 博物館教室「魚津のウォッチングポイント①
松倉城の自然と歴史」参加14人
6月12日 博物館教室「魚津のウォッチングポイント②
河原と砂浜の植物・鳥」参加6人
7月10日 博物館教室「魚津のウォッチングポイント③
南又谷の洞杉林と蛇石」参加13人
8月8日 蜃気楼写真展(～9月15日)
8月10日 新館入館者20万人達成
9月11日 博物館教室「魚津のウォッチングポイント④
平沢のトチノキ林と沌滝」参加6人
10月23日 博物館教室「魚津のウォッチングポイント⑤
秋の野山を歩こうー桃山運動公園～大谷」参加2人
11月13日 博物館教室「古代の人の食べたものートチの実を食べてみよう」参加30人
- 平成6年1月2日 「埋没林の時代展」(～2月28日)
1月22日 博物館教室「石の道具を作ってみようー石器づくりに挑戦ー」参加者25人

ご利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 12月～3月の月曜日、祝日の翌日、年末年始(4月～11月無休)
- 入館料 ・大人(高校生以上)…500円 ・小中学生…250円
- 交通 ・JR北陸本線 } 魚津駅下車(タクシー…5分)
・富山地方鉄道 } (徒歩…15分)
・北陸自動車道魚津ICより車10分

特別天然記念物 魚津埋没林博物館

〒937 富山県魚津市釈迦堂814 ☎(0765) 22-1049

